

2006年度入学生における進学目標・学科選択理由・満足度の学部間比較

小塩 真司、願興寺 礼子、桐山 雅子

1 問題と目的

中部大学には2006年度に6番目の学部である生命健康科学部が誕生し、これまで以上に多様な資質をもつ学生が入学している。理系学部、文系学部という分け方だけにとどまらず、学部による違いは様々な場所で話題となる。また、それぞれの学部がもつ特徴を的確に把握し、適切に対応することは大学全体の運営においても重要な視点であると考えられる。しかしながら、実際に、学部による学生の質的な差異は顕著にみられるものなのであろうか。教職員の主観的な印象のみでは見落としてしまうような各学部の特徴もあるといえるのではないだろうか。

中部大学では、全ての新生入生を対象として学科ごとに、4月から5月にかけて恵那研修センターで1泊2日の研修が行われている。そしてその研修では、学生相談室アンケートが毎年実施されている。小塩・願興寺・桐山(2005)は、志望理由・目標・学科選択理由を1988年度から2004年度までの新生入生で比較し、本学新生入生の全体的傾向の変化を示した。本研究では、2006年度に新生入生を対象に実施された学生相談室アンケートの中から、進学目標、学部・学科選択理由、学業への取り組み方と満足度をとり上げ、学部間で差がみられるかどうかを検討する。

2 方法

2.1 分析対象

2006年度入学生のうち、恵那研修に参加し、学生相談室アンケートに回答した1979名分のデータを分析対象とした。経営情報学部261名、国際関係学部141名、人文学部407名、工学部696名、応用生物科学部332名、生命健康科学部142名であった。

2.2 分析内容

学生相談室アンケートは4つのパートで構成されており、第1のパートは中部大学を選んだ理由や大学に進学するにあたっての目標、学科を選択した理由、第2のパートは学業への取り組み方や教員とのかかわり方、第3のパートは満足度や悩みの有無、悩みの内容、第4のパートは健康理解のための調査項目などとなっている。

本研究では、小塩・願興寺・桐山(2006)と同様に

大学への進学目標と学科選択理由について検討する。さらにこれらに加え、学業への取り組み方と学科選択の満足度を検討する。これらの設問と選択肢を表1に示す。

なお、学科選択の満足度は、「中部大学に入学し、現在の学科を選んだことについてあなたの気持ちは」という質問に対し、「満足である」から「不満である」までに「その他」を加えた6つの選択肢のうち1つを選ぶ形式であった。満足度については、「不満である」を1点、「どちらでもない」と「その他」を3点、5点が最も満足となるように得点を変換した。

表1 設問と項目内容

・この大学に進学するにあたっての目標は
(複数回答可)

1. 専門的学問、技術を身につける
2. 教養を高め、人間的に成長する
3. 就職の条件をよくする
4. 大学生活をエンジョイする
5. 教官や友人などとの人間的接触を得る
6. とくにない
7. わからない
8. その他

・いまの学科を選んだのは(複数回答可)

1. 自分の適性を考えて自分で
2. 就職や将来性を考えて自分で
3. 合格の可能性を考えて
4. 親や家族にすすめられて
5. 学校の教師の意見で
6. 友人の影響をうけて
7. 希望の学科に入れなかったため
8. その他

・学業への取り組み方(1つ選択)

1. 専門的知識を吸収し、はやく実社会に出て、専門をいかしたい
2. 社会での実力は、大学での勉学とは別だと思うので、大学での勉学は単位がとれる程度でよいと思う
3. 大学を卒業することは重要だと思うが、単位を履修することができるかどうか不安である
4. その他

3 結果と考察

3.1 進学目標について

進学目標の8項目について、学部別の選択者数と選択率を表2および図1に示す。 χ^2 検定を行ったところ、「6. とくにない」「7. わからない」以外の項目について、学部間で選択率の差がみられた。 χ^2 検定が有意であった項目については、調整済み残差を算出することにより、残差分析を行った（「8. その他」については、 χ^2 検定は有意であったが残差分析は有意ではなかった）。

「1. 専門的学問、技術を身につける」については、工学部、応用生物学部、生命健康科学部の選択率が高く、経営情報学部と人文学部の選択率が低い傾向にあった。理系の3学部に入学者の学生にとって、専門的な技術の習得はひとつの明確な目標となっているようである。

「2. 教養を高め、人間的に成長する」については、国際関係学部と人文学部の選択率が高く、工学部が低い傾向にあった。国際関係学部や人文学部といったい

わゆる文系学部に入学者の学生は、専門的学問や技術の修得よりも、教養や人間的成長を進学の目標として考えているようである。

「3. 就職の条件をよくする」については、経営情報学部、工学部の選択率が高く、人文学部、応用生物学部、生命健康科学部の選択率が低い傾向にあった。経営情報学部や工学部に進学する学生は、より良い就職先を志向している様子がうかがえる。

「4. 大学生活をエンジョイする」については、国際関係学部、人文学部の選択率が高く、応用生物学部の選択率が低い傾向にあった。国際関係学部や人文学部の新入生は他学部 비해、専門的な学問内容よりも、大学生活を楽しむ志向性をもつようである。

「5. 教官や友人などとの人間的接触を得る」については、生命健康科学部の選択率が高く、経営情報学部の選択率が低い傾向にあった。生命健康科学部に入学してきた学生は1期生であり、まだ学部の学生数が少ないことから、教員との間に密接な関係を形成することができるという期待が現れているのかもしれない。

表2 学部別の進学目標とカイ2乗検定結果

	経営情報学部		国際関係学部		人文学部		工学部		応用生物学部		生命健康科学部		χ^2 値	全学部	
	選択数	(学部%)	選択数	(学部%)	選択数	(学部%)	選択数	(学部%)	選択数	(学部%)	選択数	(学部%)		選択数	(学部%)
1. 専門的学問、技術を身につける	126	(48.28)	79	(56.03)	201	(49.39)	483	(69.40)	225	(67.77)	124	(87.32)		1238	(62.56)
残差分析結果 ^(a)	—														
2. 教養を高め、人間的に成長する	91	(34.87)	64	(45.39)	195	(47.91)	206	(29.60)	121	(36.45)	63	(44.37)		740	(37.39)
残差分析結果	+														
3. 就職の条件をよくする	102	(39.08)	41	(29.08)	99	(24.32)	223	(32.04)	80	(24.10)	21	(14.79)		566	(28.60)
残差分析結果	++														
4. 大学生活をエンジョイする	105	(40.23)	74	(52.48)	181	(44.47)	273	(39.22)	105	(31.63)	47	(33.10)		785	(39.67)
残差分析結果	++														
5. 教官や友人などとの人間的接触を得る	27	(10.34)	28	(19.86)	74	(18.18)	105	(15.09)	60	(18.07)	33	(23.24)		327	(16.52)
残差分析結果	—														
6. とくにない	13	(4.98)	4	(2.84)	12	(2.95)	23	(3.30)	7	(2.11)	4	(2.82)		63	(3.18)
残差分析結果	—														
7. わからない	5	(1.92)	2	(1.42)	9	(2.21)	8	(1.15)	5	(1.51)	2	(1.41)		31	(1.57)
残差分析結果	—														
8. その他	4	(1.53)	7	(4.96)	8	(1.97)	8	(1.15)	4	(1.20)	4	(2.82)		35	(1.77)
残差分析結果	—														
学部人数	261	(100.00)	141	(100.00)	407	(100.00)	696	(100.00)	332	(100.00)	142	(100.00)		1979	(100.00)

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

(注) 調整済み残差 +: 期待度数より多い, -: 期待度数より少ない +, - p<.05, ++, -- p<.01

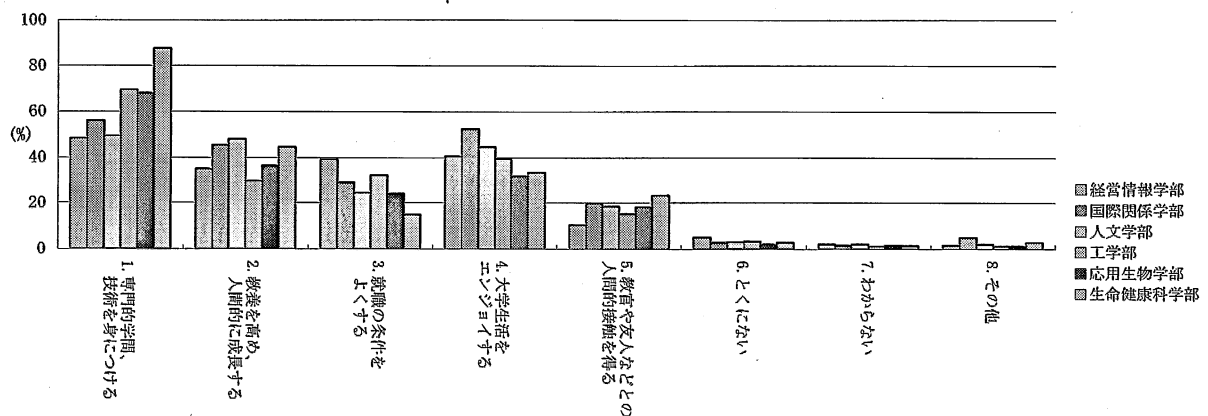


図1 学部別の進学目標

3.2 学科選択理由について

学科選択理由の8項目について、学部別の選択率を表3および図2に示す。 χ^2 検定を行ったところ、「4. 親や家族にすすめられて」「6. 友人の影響をうけて」「7. 希望の学科に入れなかったので」の3項目以外で学部による有意な選択率の差がみられた。

「1. 自分の適性を考えて自分で」については、人文学部と応用生物学部の選択率が高く、経営情報学部、国際関係学部、工学部の選択率が低い傾向にあった。

「2. 就職や将来性を考えて自分で」については、経営情報学部、生命健康科学部の選択率が高く、人文学部の選択率が低い傾向にあった。

「3. 合格の可能性を考えて」については、経営情報学部と国際関係学部の選択率が高く、工学部と生命健康科学部の選択率が低い傾向にあった。

「5. 学校の教師の意見で」については、経営情報学部と国際関係学部の選択率が高く、工学部の選択率が低い傾向にあった。

いずれの学部についても、最も多い学科選択理由は「1. 自分の適性を考えて自分で」あるいは「2. 就職や将来性を考えて自分で」のいずれかであり、人文学部と応用生物学部は前者が、経営情報学部、国際関係学部、工学部、生命健康科学部は後者が多い傾向にあった。

また、「4. 親や家族にすすめられて」や「5. 学校の教師の意見で」「6. 友人の影響をうけて」といった自分以外の人物の影響による学科選択理由の選択率はいずれも10%未満（いずれも全体で5%未満）であり、新入生の多くは自分自身で入学する学科を選択していると認識する傾向がうかがえる。

表3 学部別の学科選択理由とカイ2乗検定結果

	経営情報学部		国際関係学部		人文学部		工学部		応用生物学部		生命健康科学部		χ^2 値	全学部	
	選択数	(学部%)	選択数	(学部%)	選択数	(学部%)	選択数	(学部%)	選択数	(学部%)	選択数	(学部%)		選択数	(学部%)
1. 自分の適性を考えて自分で	89	(34.10)	54	(38.30)	246	(60.44)	320	(45.98)	212	(63.86)	66	(46.48)	82.562 ***	987	(49.87)
残差分析結果	—		—		++		—		++		—				
2. 就職や将来性を考えて自分で	164	(62.84)	69	(48.94)	152	(37.35)	351	(50.43)	154	(46.39)	92	(64.79)	57.428 ***	982	(49.62)
残差分析結果	++		—		—		—		—		++				
3. 合格の可能性を考えて	36	(13.79)	31	(21.99)	36	(8.85)	56	(8.05)	34	(10.24)	5	(3.52)	36.863 ***	198	(10.01)
残差分析結果	+		++		—		—		—		—				
4. 親や家族にすすめられて	6	(2.30)	4	(2.84)	10	(2.46)	19	(2.73)	4	(1.20)	8	(5.63)	7.981	51	(2.58)
残差分析結果	—		—		—		—		—		—				
5. 学校の教師の意見で	22	(8.43)	13	(9.22)	18	(4.42)	23	(3.30)	10	(3.01)	7	(4.93)	19.761 **	93	(4.70)
残差分析結果	++		++		—		—		—		—				
6. 友人の影響をうけて	11	(4.21)	4	(2.84)	11	(2.70)	15	(2.16)	2	(0.60)	2	(1.41)	9.658	45	(2.27)
残差分析結果	—		—		—		—		—		—				
7. 希望の学科に入れなかったので	12	(4.60)	7	(4.96)	26	(6.39)	57	(8.19)	18	(5.42)	8	(5.63)	6.215	128	(6.47)
残差分析結果	—		—		—		—		—		—				
8. その他	4	(1.53)	9	(6.38)	19	(4.67)	30	(4.31)	7	(2.11)	8	(5.63)	11.183 *	77	(3.89)
残差分析結果	—		—		—		—		—		—				
学部人数	261	(100.00)	141	(100.00)	407	(100.00)	696	(100.00)	332	(100.00)	142	(100.00)		1979	(100.00)

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(注) 調整済み残差 +: 期待度数より多い, -: 期待度数より少ない +, - $p < .05$, ++, -- $p < .01$

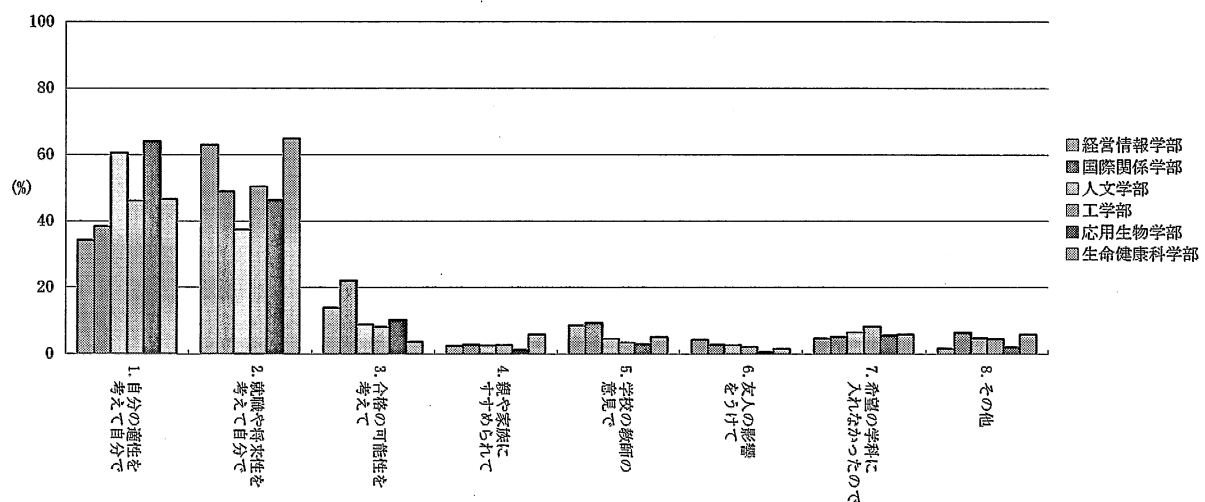


図2 学部別の学科選択理由

3.3 学業への取り組み方について

学業への取り組み方の4つの選択肢について、学部による選択比率の違いを χ^2 検定で検討したところ、有意であった($\chi^2(df=15, N=1979)=92.62, p<.001$)。学部別の選択数および選択比率、残差分析を表4に、学部別の選択比率を図3に示す。

残差分析の結果から、経営情報学部は他学部に比べて「2. 単位がとれる程度」と回答する割合が高いこと、国際関係学部は「1. 専門を生かしたい」と回答する割合が多く「3. 単位取得の不安」が低いこと、

人文学部は「1. 専門を生かしたい」と回答する割合が低く「2. 単位がとれる程度」「3. 単位取得の不安」が高いこと、工学部は「1. 専門を生かしたい」と回答する割合が多く「2. 単位がとれる程度」が低いこと、応用生物学部は「3. 単位取得の不安」が高い傾向にあること、生命健康科学部は「1. 専門を生かしたい」と回答する割合が高く「2. 単位がとれる程度」「3. 単位取得の不安」が低い傾向にあることが示された。

表4 学部別の学業への取り組み方とカイ2乗検定結果

	経営情報学部	国際関係学部	人文学部	工学部	応用生物学部	生命健康科学部	計
	選択数 (学部%)	選択数 (学部%)	選択数 (学部%)	選択数 (学部%)	選択数 (学部%)	選択数 (学部%)	選択数 (学部%)
1. 専門的知識を吸収し、はやく実社会に出て、専門をいかしたい	106 (40.61)	70 (49.65)	127 (31.20)	323 (46.41)	130 (39.16)	85 (59.86)	841 (42.50)
2. 社会での実力は、大学での勉学とは別だと思うので、大学での勉学は単位がとれる程度でよいと思う	52 (19.92)	22 (15.60)	71 (17.44)	68 (9.77)	37 (11.14)	6 (4.23)	256 (12.94)
3. 大学を卒業することは重要だと思うが、単位を履修することができかどうか不安である	101 (38.70)	48 (34.04)	197 (48.40)	292 (41.95)	156 (46.99)	41 (28.87)	835 (42.19)
4. その他	2 (0.77)	1 (0.71)	12 (2.95)	13 (1.87)	9 (2.71)	10 (7.04)	47 (2.37)
計	261 (100.00)	141 (100.00)	407 (100.00)	696 (100.00)	332 (100.00)	142 (100.00)	1979 (100.00)

$\chi^2(df=15, N=1979)=92.62, p<.001$

(注) 調整済み残差 +: 期待度数より多い, -: 期待度数より少ない +, - p<.05, ++, -- p<.01

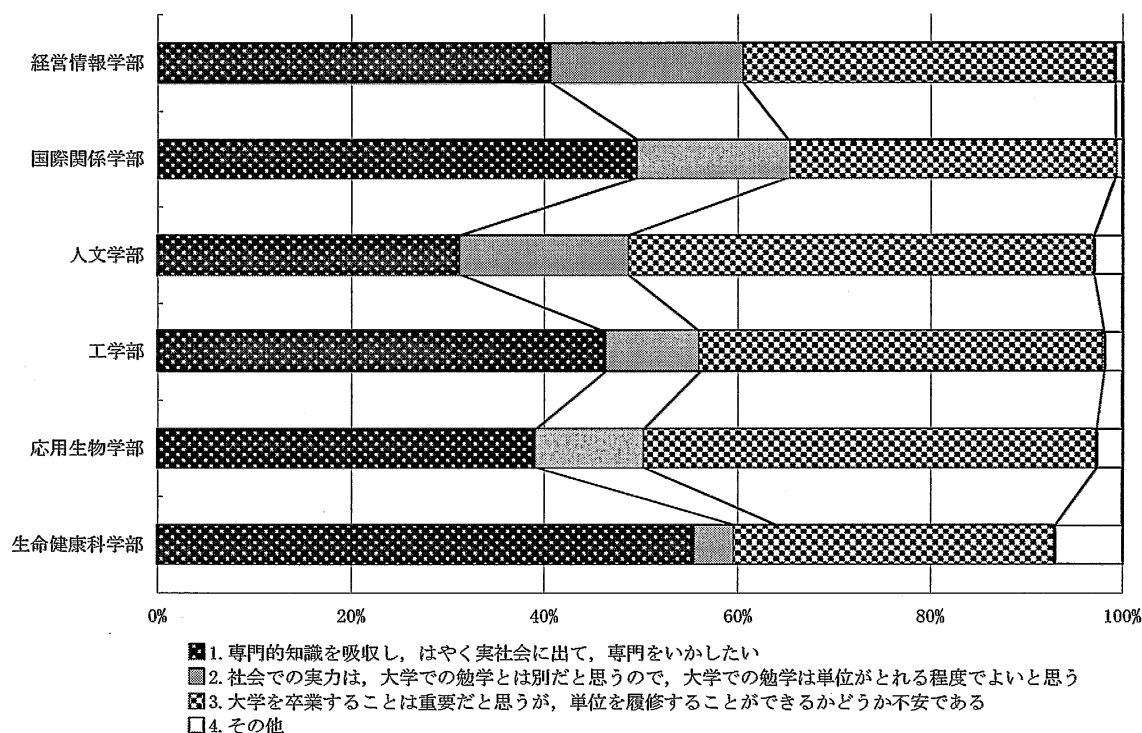


図3 学部別の学業への取り組み方

3.4 学科選択の満足度について

学科選択の満足度の平均値を表5に示す。各学部の学科選択満足度は3.56（経営情報学部）から3.98（生命健康科学部）の範囲にあり、全学部の平均値は3.77（SD 1.06）であった。得点幅が1点から5点であることを考慮すると、全体としてある程度高い満足度を示していると考えられる。

学科選択の満足度について学部間の得点差を検討するために分散分析を行ったところ、有意であった

（ $F(5, 1973)=4.04, p<.01$ ）。多重比較（TukeyのHSD法、5%水準）を行ったところ、人文学部、応用生物学部、生命健康科学部よりも経営情報学部の満足度が低いという結果が得られた。

学部ごとの満足度のヒストグラムを図4に示す。いずれの学部についても高い満足度を回答する新入生は多い傾向にあったが、経営情報学部についてはその割合がやや低い傾向にあるようであった。

表5 学部別の満足度と分散分析、多重比較結果

	経営情報学部		国際関係学部		人文学部		工学部		応用生物学部		生命健康科学部		
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	$F(5, 1973)$
満足度	3.56	(0.98)	3.79	(1.06)	3.83	(1.10)	3.74	(1.06)	3.85	(1.02)	3.98	(1.11)	4.04 $p<.01$
多重比較結果	経営情報<人文、経営情報<応用生物、経営情報<生命健康												

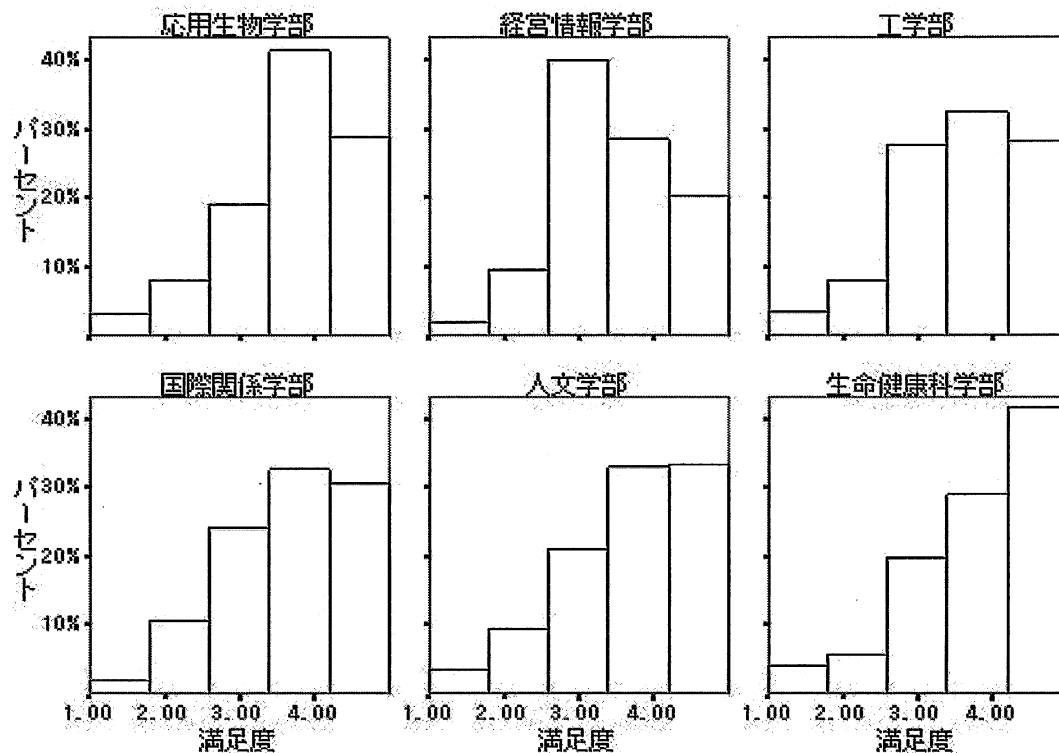


図4 学部別の満足度のヒストグラム

4 まとめ

本研究は2006年度新入生を対象に実施された学生相談室アンケートの中から、進学目標、学部・学科選択理由、学業への取り組み方と満足度を挙げた。

進学目標については「6. とくにない」「7. わからない」「8. その他」を選択した学生は全体として少なく、大多数の新入生は何らかの進学目標を有していることが分かる。また、「2. 教養を高め、人間的に成長する」「4. 大学生活をエンジョイする」を40%程度の学生が、「5. 共感や友人などの人間的接触を得る」は16%以上の学生が選択していた。これら3つの選択肢を選ぶ新入生は、授業以外の大学生活の充実を求めていると考えられる。大学として、このような学生に対して何が提供できるのかを考える必要性があるだろう。

学科選択理由については、「1. 自分の適性を考えて自分で」と「2. 就職や将来性を考えて」を半数近くの新入生が選択していた。次に多かったのは「3. 合格の可能性を考えて」であるが、選択したのは10%程度に過ぎなかった。この結果は、新入生が自分自身で本学の学科を選択して入学してくる傾向が強いことを表していると考えられる。

学業への取り組み方については「1. 専門を生かしたい」と「3. 単位取得の不安」を選択した者が約42%ずつと、ほぼ同数という結果であった。学部によって差がみられるものの、全学で約4割の学生が単位取得の不安を感じているようである。このような不安を少しでも低減させるような新入生へのきめ細かい対応が必要とされているのかもしれない。

学科選択の満足度は、入学した学生が自らの希望や意識を入学後の学部・学科の現状に照らし合わせたときに、全体としてどの程度満足できているかを意味していると考えられる。全学部の平均値は3.77と比較的

高い得点となっていた。新入生の満足度はその後の学生生活や大学に対する考え方にも大きく影響を及ぼすと考えられるため、この満足度をある程度高い位置で保つような試みが求められていると言えよう。

本研究で焦点を当てた4つの指標のうち、進学目標と学科選択理由、学業への取り組み方は、新入生がどのような希望や意識をもって本大学、学部、学科に入学してくるのかを反映していると考えられる。進学目標や学科選択理由、学業への取り組み方において、学部間の選択率には有意な差がみられた。またこの差は、文系学部・理系学部という枠組みだけで説明できるものでもないように思われる。本研究で示された結果を概観すると、受験生が各学部を求める内容にはそれぞれ特徴があり、その特徴を吟味した上で学生が入学してくる様子がうかがえる。各学部が想定している学修内容と新入生の希望や意識とを照らし合わせる試みが必要とされるのかもしれない。

本研究では、得られた結果から各学部の特徴について考察することに主眼を置いていない。なぜなら、筆者らは各学部で課題とされている内容を明確に理解しているわけではないからである。また、本研究で示された学部間の比較は、あくまでも2006年度新入生のものであり、以前の新生との比較を行っているわけではないという点にも注意が必要である。しかしながら、最新の学部ごとの新生の動向を理解する上において、本研究の結果は基礎的な資料となるであろう。

文献

小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子 2005 中部大学入学生における志望理由・目標・学科選択理由の変化—1988年度入学生から2004年度入学生までの比較—中部大学教育研究, 5, pp.15-24.

{	助教授	人文学部	心理学科	小塩 真司
	助教授	人文学部	心理学科	願興寺礼子
	教授	学生相談室		桐山 雅子